

# 技術・家庭科

金 澤 彰 裕  
齋 藤 弘 子

## I 研究主題と技術・家庭科

### 1. 研究主題のとらえ方—教科の「目指す生徒像」

技術・家庭科では、研究主題を踏まえ、本教科で目指す生徒像を次のように考え、2年次の実践に取り組んできた。

#### 【技術・家庭科の目指す生徒像】

社会の変化に主体的に対応し、進んで生活を工夫し創造する力と 実践的な態度を身に付けた生徒
---

変化が激しく、複雑で困難な問題への対応が予想される社会の中で、生徒は技術革新の担い手となって活躍しなければならない存在である。そこで、生活における様々な課題が見つかったときに、生徒一人一人が主体的に問題を解決していく力が必要とされる。また、限られた条件や置かれた状況を踏まえ、習得した知識及び技能を活用して解決する力を身に付けなければならないと考える。

技術・家庭科では、これまで取り組んできた①問題解決型学習をさらに吟味し、②学習した知識や技術を活用し、おかれた状況（設定条件）を踏まえて③よりよい解決策を導き出す実践を授業の中で重ねることで、進んで生活を工夫し創造する力と実践的な態度を育むことにつながると考える。

#### 【3年間で目指す具体的な生徒の姿】

重視している資質・能力	教科で育てる資質・能力	手立て
よりよいものを求める探究心や自主性、社会性	・進んで技術とかかわり、家庭生活や社会をよりよくしようとする態度	・様々な生活事象や社会の変化と学習内容を関連付けて考えさせる。
知識や技能、経験の生かし所を見いだす力	・課題解決に向け、既習事項を活用しながら、自分なりの新しい考え方やとらえ方を加え、様々な視点から解決策を考える力	・取り巻く生活の中から課題を見付け出すように具体例などを提示し、解決に向かった学習活動を振り返らせ、自らの学びを意識させる。
場に応じて判断基準をつくる力	・課題の解決策を、条件を踏まえて構想する力。 ・情報を分析・選択、試行・試作等を通じてよりよい解決策を具現化する力	・課題解決に必要な情報を整理させて解決への道すじを検討させる。 ・具現化するために、自分なりの理由や科学的根拠を持たせて交流させる。
学びを評価し、課題を見付ける力	・よりよい生活や持続可能な社会の創造に向け、主体的に取り組む力	・地域、時間、社会、環境、経済的視点など多角的に振り返る場面を設定する。

## 2. 研究のあゆみ

技術・家庭科では、前研究で、学習した技能だけでなく、技術・家庭科で身に付けたものの見方・考え方を活用して、自分の生活の中から課題を見付け、生かすところに至っていないという実態があった。そのため、「技術」は生活の様々な所に存在していることは感じているが、「自分の今ある生活に役立っているとは言えない」という生徒もいる。普段の生活でのこぎり・釘打ち・はんだづけ等を日頃から行うことは無く、技術・家庭科を単なる作る活動と捉えているという課題が挙げられた。そこで本研究では、様々な生活事象や社会の変化と関連付けた課題を設定し、解決に向けて技術・家庭科ならではの見方・考え方を働かせ、学習に取り組むことで、教科の目指す資質・能力を育む場面の設定を重視して研究に取り組んでいく。

具体的には、授業の中で、生徒が普段の生活の中で実感できる課題や教材の開発をすることと、生徒が課題を解決するために「技術・家庭科の見方・考え方」を働かせて技術を最適化することに取り組ませることに重点を置く。より深く追求するためには、課題解決に必要な情報を整理し、既習事項を活用しながら、自分なりの新しい考え方を加え、様々な視点から解決策を模索する力が必要であると考えられる。生徒が日常生活で直面する課題は、必ずしも答えが一つとは限らないことが多い。その時の置かれた状況や条件によって優先されることが変わったり、どちらかを優先すると他方が犠牲になったりすることがある。よりよい解決策にするためには、他者との交流、時間的視点、社会的視点、環境的視点、経済的視点などを組み合わせつつ、多角的に判断する必要がある。そのような場合に情報を分析・選択し、自分なりの根拠や科学的根拠を基に、よりよい解決策を考えさせる場を授業の中で設定する。これらのことに重点を置くことで、技術・家庭科としてのものの見方・考え方と、変化が激しく、複雑で困難な問題への対応が予想される社会の中でも主体的に生き抜く力が身に付くと考えている。

## 3. 教科としての振り返り

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

- 生活と関連付けた課題を設定することで、教材とじっくり向き合い、今ある課題に目を向け、それを解決しようとする姿勢が見られた。
- 課題に条件を設定することで、話し合いの場面において、他者の意見から経済的側面、環境的側面など多面的に考えることができた。
- 授業が授業で終わらず、生活に広げて考えていることが、どの学年からもうかがえる。学んだことが生活とつながり、習得した知識・技能を生活で生かせるようになることが重要である。そのため具体的な場면을提示してイメージをつかませ、発展した思考へと広がるように工夫した。
- ▲「技術」は生活の様々な所に存在していることは感じているが、「自分の今ある生活に役立っているとは言えない」という生徒もいる。普段の生活でのこぎり・釘打ち・はんだづけ等を日頃から行うことは無い。単なる「つくる」活動ではなく、技術ならではの「視点や思考」を用いることができる生活がより豊かになると実感させたい。

次に、実践事例を紹介し、それぞれの実践から見えてきた具体的な成果と課題を報告する。